2021 Vol<u>.</u>

飛騨川に浮かぶ中の島

馬頭観音が祀られた小山観音

地域の治水・利水 平安時代から続く伝統の干柿・堂上蜂屋柿 移り変わる木曽川河畔太田の渡しからリバー 史 記

承久の乱と木曽 「阿井渡」の所在について 究資

可児市文化スポーツ部文化財課長 川合 俊

8

5

3

地

域

平安時代から続 堂上蜂屋柿 伝統の干柿

が施されます。 き出させる「ニオボウキがけ」など伝統な工程 ひとつなでていく「手もみ」や表面に糖分を浮 め、全て手作業で皮むきされます。 な柿を収穫します。その四角い形を活かすた 干し上げでは、乾燥状態を確認しながら一つ 一本の枝に一個の果実を実らせ、 (濃加茂市の代表的な特産品・堂上蜂屋柿 より大き

丹念に作られた堂上蜂屋柿は、食の芸術とい

われる極上品として国の内外から高い評価を受 けています

が献上された際に明衡が書いた礼状が収録され たもので、その中に美濃国の国司から朝廷に干柿 され手紙の手本とされている『明衡往来』は、 含まれますが、本稿ではもっぱら干柿を指すこと 屋柿など種々の名称で呼ばれていました。蜂屋柿 なったのは明治以降で、それまでは堂上柿とか蜂 ています。明衡が、「この枝柿は蜜より甘い」と 安時代中期の学者である藤原明衡の手紙を集め されていたことによっています。古来より名文と 指す言葉で、蜂屋で作られる干柿が、朝廷に献上 とします。堂上とは、昇殿を許された公家の格を には、加工前の生柿と製品になった干柿の両方が

> 寺領十石と柿寺の称号を授けられたと云われて を室町幕府十代将軍足利義植に献上したところ、援助を受け創建されたとされ、仁済宗恕が蜂屋柿

さらに、天下人となった豊臣秀吉にも蜂屋村か

代後期に、当時の美濃国守護の土岐美濃守成頼の

また蜂屋町にある瑞林寺は、仁済宗恕が室町



れたという干柿

〈提供:美濃加茂市産業振興部〉



化粧箱に貼られたレッテル (明治末期) : 美濃加茂市民ミュ

蜂屋柿上納徳川将軍家

願い出て認められたと記されています。

に望みはないかと問われたので、村の諸役免除を ろ、永楽銭五十貫文と寺領十石を与えられ、 の明岳紹審が伏見城において干柿を献上したとこ います。これは瑞林寺寺伝によれば、瑞林寺四世 れていた課役が免除されようになったと云われて ら干柿が献上されており、それ以降、村に課せら

手に入る吉兆」と喜び、当座の褒美としてこれま する徳川家康に、墨俣で出迎えた蜂屋村の頭百姓 話が残っています。この時家康は、「早速大がき 立ち、石田方の立て籠もる大垣城を目指して進軍 が山田長右衛門の取次ぎによって干柿を献上した 慶長五(一六〇〇)年九月、関ヶ原の戦いに先

堂上蜂屋柿を誇る

四On~二四Onのなだらかな波状地形が広がっ れている蜂屋柿の原産地で、当地で生産されるエ ています。この蜂屋丘陵地は、全国各地で栽培さ 大きさで極上品とされています。 柿は、「堂上蜂屋柿」の名で知られ、その甘味と 茂市の中心地には、蜂屋丘陵地と呼ばれる標高 木曽川中流域の右岸に位置する岐阜県美濃加

なって吹き下ろすため、秋に収穫した柿を干すの に適した気候風土となっています。 く、奥美濃で雪を降らせた風が山を越えて乾風と 美濃加茂市は、岐阜県内でも冬の晴天率が高

この干柿が、「堂上蜂屋柿」と呼ばれるように

てきました。 評した一文に、蜂屋柿とは記されていませ んが、古来より地元では蜂屋産と考えられ

屋の名を与えたという伝承があります の蜜のように甘い」と高く評価され、村と柿に蜂 九〇)に源頼朝へ干柿を献上したところ、「蜂 蜂屋の名前について、文治年間(一一八五~一

『明衡往来』 (寛永十九年刊) 〈提供:美濃加茂ミュージアム蔵〉

御菓子場(将軍や大奥に果物やその加工品を納め るところ)に指定して、毎年の上納を命じたとい で通り蜂屋村の諸役免除を認め、さらに蜂屋村を

まで通りと仰せ付けがあったとしています。 て家康に干柿を献上し、寺領や村の諸役免除は今 寺の寺伝にも、六世の江国和尚が墨俣宿に出向い 緒に関する多くの文書の冒頭に出てきます。瑞林 の吉兆」として、江戸時代に書かれた蜂屋柿の中 この話は後世に広く伝えられ、「権現様(家康)

話の信憑性については疑義が生じ、山田長右衛門 治世と同様に継続されていきました。 じて、蜂屋村の諸役免除と瑞林寺領十石は秀吉の する説もあります。いずれにしても江戸時代を通 が献上されたのは関ヶ原の戦い以後のことと推察 が大久保長安配下の代官であることから、蜂屋柿 され、墨俣は通過していません。このことから、 付近で長良川を渡り赤坂に着いて本営に入ったと ただ歴史の定説では、家康は岐阜を発して木田

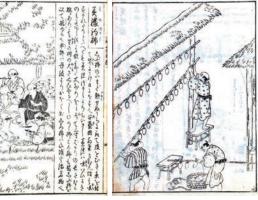
納しました。家康が秀忠に将軍職を譲り、駿府 送り届けるよう依頼した文書が残っています 柿を送りました。、瑞林寺には、、駿府へ柿を継ぎ送 (静岡) に退いてからは、江戸・駿府の両方に干 御菓子場に指定された蜂屋村は、毎年干柿を上 、岡田将監の配下が宿場々々に、油断なく

てからは、干柿は尾張藩に上納することとなり、

元和五(一六一九)年に蜂屋村が尾張藩領になっ



美濃国の「柿寺」のひとつ瑞林寺 蜂屋柿に関する由緒書が残されている



当時の干柿の生産の様子を描いた「美濃釣柿」(日本山海名産図会) : 蜂屋柿 その歴史と人々展(美濃加茂ミュ

外には売らないよう命じました。 の集荷に便宜を図り、美濃の村々に蜂屋と岐阜以 を購入した例も見られます。尾張藩は、原料の柿 を買い集めました。また、直接製品となった干柿

激に増加し、寛文年間(一六六一~一六七三)に 張藩の注文は、慶安三(一六五〇)年ごろから急 絶えず藩の意向をうかがう必要がありました。尾 されますが、それよりも尾張藩の注文数によって かかる作業と細心の注意が必要で、また干上げ工 りました。良質な蜂屋柿を生産するには、手間が 大きく変わりました。従って生産にあたっては、 まりを考慮して製造していました。 正徳元 (一七 程は気候に左右されやすいため、あらかじめ歩留 に対し三十万ほどの原料柿を買い入れたと記され 一) 年の「御柿入用積書」には、 蜂屋柿の生産量は、原料の柿の収穫量にも左右 年間九万、十万、十二~三万という注文があ 三万余の上納

江戸時代半ばから上納の注文は減少し、幕末には 半で、十八世紀以後は次第に減少していきました。 蜂屋柿の生産額が最も多かったのは十七世紀後

尾張藩より「献上に及ばむ」と通達がありました。 機構の発達に伴って現金収入が拡大したので、蜂 その一方で、市中に売り出す量は増加し、流涌

屋村の経済に及ぼす打撃は少なかったようです。 衰退と復活堂上蜂屋柿の

年のセントルイス万博では、金牌の栄誉に輝きま 蜂屋柿は、銀牌を獲得し、明治三十七(一九〇四) 外でもその上質の味わいが高く評価され、明治三 た。明治政府の地場産業の振興策として企画され 柿は美濃を代表する特産品として生産されまし 屋村は諸役免除などの特典を失いましたが、蜂屋 十三 (一九〇〇) 年のパリ万博に出品された堂上 に勧業博覧会に出品、褒状を授与されました。 海 明治期になると蜂屋柿の上納は廃止となり、

絶えてしまいました。 者もなく、千年の伝統を誇った蜂屋柿づくりは途 原木が特定できなくなり、干柿の製法を引き継ぐ わって桑が植えられました。昭和初期には、 蚕業が盛況となる中、蜂屋村でも次第に柿に代 一方、生糸が主要な輸出品となり、全国的に養 、柿の

存や人工乾燥など科学的技術を導入して品質の 振興会が発足し、伝統製法の継承に加え、低温保 蜂屋柿は姿を見せませんでした。昭和五十三(一 安定・向上を図り、生産・販売量を拡大させてき 九七八)年、堂上蜂屋柿の復活を目指して蜂屋柿 その後、太平洋戦争を経て、戦後も長らく堂上



2007年に堂上蜂屋柿が認定された 「味の箱舟」の認定書

〈提供:美濃加茂市産業振興

『美濃加茂市史

『堂上蜂屋柿 JAめぐみの蜂屋支店パンフレット

自然と歴史が育んだ特産品「堂上蜂屋柿」 〈提供:美濃加茂市産業振興部〉

価値が認められたのです。 認定条件となっている国際的プロジェクトにその 限られた生産者による希少な産品であることが ジェクトに、堂上蜂屋柿が認定されました。おい るスローフード協会が推進する「味の箱舟」プロ しさだけではなく、その歴史、地域との関わり、 平成十九 (IOO七) 年、イタリアに本部があ

知的財産として登録し保護する制度です。 等の特性が、品質等の特性に結びついている産品 統的な生産方法や気候・風土・土壌などの生産地 について、これらの産品の名称(地理的表示) されました。地理的表示(G-)保護制度は、 地理的表示(Gー)保護制度に堂上蜂屋柿が登録 平成二十九(二〇一七)年には、農林水産省の 伝 を

スタイルや空間においても悠久の時が感じられる のスイーツとしてブランドを確立し、洋風の生活 品であり続けています 千年の歴史を誇る堂上蜂屋柿は、現代でも極上

通史編 昭和五十五年

美濃加茂市

『蜂屋柿 その歴史と人々展』 平成二十年 美濃加茂市民ミュージアム

二〇〇〇年 秋元浩 『千年の歴史の味、堂上蜂屋柿』

太田の渡しからリバーポートパーク 移り変わる木曽川河畔

がなくなり、かつての賑わいは失われました。 と係わってきました。 初めまで人と貨物を運び、地域の人々の暮らし よって、川と人との新しい関係が築かれようと 業」によって積極的に河川に目を向けることに の一つであった太田の渡しは、中世から昭和の くばよい」と謡われ、 現在の木曽川河畔では、「かわまちづくり事 しかしながら、太田橋の架橋によって渡船場 中山道における三大難所 北峠がな

-ク美濃加茂 〈提供:美濃加茂市産業振興部〉



太田の渡し、

太中田山 渡のし難

段状の低地が広がっています。この美濃加茂盆地 河岸段丘群からなり、美濃加茂盆地と呼ばれる階 には、古くから集落が発達し、木曽川を隔てた可 ・飛騨川の堆積・侵食活動によって形成された 美濃加茂市の南部は、第四紀洪積世以降の木曽

だったようです。 川右岸に兵力を展開して、木曽川で幕府軍を食い 世紀以前から渡しが存在し、太田は交通の要衝 井戸の渡しは、後の太田の渡しと考えられ、 十三 止めようとしました。主戦場のひとつとなった大 では、東上する鎌倉幕府軍に対して朝廷側は木曽 承久三 (一二二一) 年五月に起こった承久の乱

の渡しは領主によって保護されていたことがわか が出されています。そこには、「加茂郡太田村の 行った際、太田の渡しの船頭屋敷に対して安堵状 内に於いて、石高三石九斗九升六合、太田渡船頭 人の屋敷、先規の如く」とあり、以前より太田 慶長十五(一六一〇)年に大久保長安が検地を

中世における渡船場の位置は、確かな史料がな



太田の渡し跡(化石林公園) 〈提供・美濃加茂市産業振興部〉

児地域との往来も盛んでした。

太田渡場変遷図 国道248号 国道21・41号 中山道

保年間(一七一六~一七三六)に作成された「木く判然としません。近世では、十八世紀前半の亨 場の変更を余儀なくされたことが考えられます。 の土木技術では洪水によって川筋が変わると渡船 の界へ越すなり」とあります。 は「渡船場は村東にあり、今は土田村と今渡村と 年間(一七八九~一八〇一)の『尾張徇行記』に 只今にては拾弐三丁も川上」とあり、また、寛政 願」には、「太田川渡船場。往古より追々川瀬替、 側の渡船場が今渡になっています。天明七(一七 八三四)年に皇都書林が発行した地図では、左岸 淵の近くに描かれています。ところが、天保五(一 曽川川並絵図」を見ると、左岸側の渡船場は牛カ 船場は上流へ変更されており、その理由は、 八七)年の「太田川(木曽川)渡船場三日役免除 宿が発展して新町が東の方へ延びたことと、 当時 このように、十八世紀から十九世紀にかけて渡 十八世紀前半の亨

り」と記しています。中山道の三大難所の一つと 難がつきまとっていました。 して水深が浅かったため、水流が急で渡船には凩 云われた太田の渡しは、豊富な木曽川の水量に対 畝が『壬戌紀行』で「流れ急にして、目くるばか ということになります。水流については、太田南 が二四六m程度、平常時の流水幅が一五五m程度 程船渡し」と記載されており、河原を入れた川幅 三拾五間、船渡」「太田川、常水幅大概八拾五間 概帳」に「土田村・太田宿の間、太田川、川幅百 ました。川幅は、十九世紀中頃の「中山道宿村大 十六㎝ほどで、左岸側のほうが少し深くなってい 江戸時代の太田付近の木曽川は、水深六十~七

太田橋の架橋岡田式渡船と

輸送にも差しつかえ、平時でも両岸でかなりの待 生じました。木曽川の増水時には急病人や公用の 太田の渡しの渡船需要は増え続け、明治三十年代 には混雑をきわめ、 明治になり中山道宿駅制度が廃止された後も、 川越えにはさまざまな不便が

なってきま 状況を打開 するように 貨物が停滞 し、人馬・ 5時間を要 こうした

通史編〉

岡田式太田渡船 (明治末期) 〈出典:美濃加茂市史

明治三十五(一九〇二)年三月で、これにより増 の輸送が可能になったと推算されています。 水による通航止めがなくなり、一日に約四十トン 方式でした。この装置の運用が開始されたのは、 組んで鋼鉄線を張り、滑車によって船を導く渡船

> のため、大正十三(一九二四)年には、下古井と の増加が著しく、両岸での待ち時間は延びる一方 三m、延長三八八・四mの長大橋が昭和二(一九 今渡を結ぶ太田橋の建設工事が始まり、幅員六・ だったため、橋の架設が切望されてきました。こ と受け継がれてきた太田の渡しはその役目を終え 一七)年に完成し、中世の大井戸の渡しより延々

による地域振興 かわまちづくり事業

めて、河川と人の暮らしの関係性も薄らいできま 曽川は、護岸整備が進みかつての面影は影をひそ 中山道の渡船場として賑わった太田宿周辺の木

史や文化、人々の生活とのつながりなど、その地 年はそれに加えて河川環境の整備や河川と地域 域特有の資源が眠っているとして、水辺を活かす 係わりでは、河川には古くから培われた地域の歴 社会との連携などにも注力しています。地域との 事業を長い年月にわたって進めてきましたが、近 『かわまちづくり』を促進しています。 国土交通省は、河川の氾濫から地域を守る治水

茂市は、平成二十二 (二〇一〇) 年に「かわまち ド・ソフト両面から支援を行っています。美濃加 どからの申請に基づき計画の登録を行い、ハー づくり協議会」を発足し、翌平成二十三(二〇 化や観光振興などを目的に、市町村や民間事業 一)年には「かわまちづくり基本計画」を策定し して、地域の賑わい創出を目指す取り組みです。 か融合した良好な空間を形成し、河川空間を活か 地域の創意に富んだ 「知恵」 を活かし、 地域活性 **『かわまちづくり』支援制度を創設し、市町村な 運携することにより、「河川空間」と「まち空間」** 平成二十一(二〇〇九)年度に国土交通省は、 『かわまちづくり』は、地域が持つ「資源」や 地域住民などと河川管理者が各々の取組みを

岡田只治が

したのが、

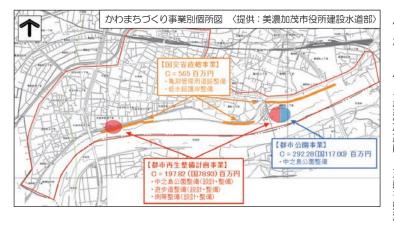
両岸に櫓を 考案した、

美濃加茂市の「かわまちづくり基本計画」で

ただし、輸送力が強化されたことにより輸送量

り、エリア全体の活性化を図るとしました。 実施し、それぞれの賑わいを有効に結ぶことによ を バーポートパーク美濃加茂」を拠点として事業を しています。「美濃太田駅」、「中山道会館」、「リ から人々が訪れる賑わいのあるまちづくりを目指 観光やまちづくりの核として活用し、市内外 木曽川の自然や中山道の歴史などの地域資源

リバーポートパーク美濃加茂は、『五感を刺激



ニューアルしてオープンしました。川遊びやバー し、かわとまちを繋げるために船着場や水際遊歩 が交わる交流拠点として整備されました。各種イ デザインし、人と人、人と自然、多世代・多文化 共同で考え、それらを繋げるように公園・施設を ベキュー、プレイパークなどのプログラムを官民 に、令和二(二〇二〇)年四月に中之島公園を口 する遊びと学びを体感できる公園』をコンセプト ベントの開催により、賑わいと憩いの空間を創出

> 道の整備、コミュ 事業を実施してい タサイクルの運営 ニティバス・レン

アップパドルボー 行して、スタンド もったガイドが同 で、ライセンスを ティビティが人気 めるリバーアク 曽川で気軽に楽し 川遊びでは、

気軽に楽しめるリバーアクティビティ

〈提供:美濃加茂市産業振興部〉

供でも安心して体験できます。 ドやラフティング、カヌーなど初心者や小さな子

方法などを受講できるプログラムとなっていま 発を行い、川遊びとともにライフジャケット装着 ネジメント講習では、川の危険性や万が一の対処 学びの場を提供しています。さらに川のリスクマ 肺蘇生法講習、今渡ダムツアーなど多岐にわたる 開催し、森のリスクマネジメント、化石講座、心 法などを教え、木曽川への親しみと事故防止の啓 また、活動の一環として「川と森の勉強会」を

で、地域の活性化に繋げる取り組みが始まってい 川と親しみ、水辺に新たな価値を見い出すこと ていた木曽川河畔では、今、新しい形で人々が河 かつて、太田の渡しとして地域と密接に係わっ

■参考文献

『美濃加茂市史 通史編』

MINOKAMO 「中山道 太田宿」 美濃加茂市観光パンフレット ACTIVITY 昭和五十五年 美濃加茂市

riverJ 「かわまちづくり Make the city from the 美濃加茂市観光パンフレット

国土交通省 WEB サイト

地域と河川

東海道線敷設

見 明治改修計画図

架橋に関する地元住民の不安について触れてみ すべきですが、工事費は高額となります。 なったようです。

ます。

洪水に対して安全にするには、長くて高い橋に 鉄道局と内務省土木局のデ・レイケとの論争や、 の協議は大変であり、明治改修でもトラブルに このため、現在でも河川管理者と橋梁設置者 本章では、鉄道敷設に伴って発生した工部省 鉄道が川越えをするには、鉄橋が必要です。

定したものの、 明治政府が東京・京都間を結ぶ幹線の建設を決 ましたが、鉄道は明治二(一八六九)年十一月、 治改修工事は、明治二十(一八八七)年に始まり の西洋の文明が入ってきました。木曽三川の明 明治の時代を迎え、文明開化の名の下に多く その路線は未定でした。

幹垣路以

線東

()

の路線も上記のニルート がありました。鉄道幹線 海道と中山道のニルート を連絡する交通路は、 明 治以 前 江戸と京 東

検討され、 山岳地域の一気人 で以來大に影響を及は一通行人をどは從前の十分一 納大垣間鐵道連絡して濱車の往來をおせる至りしよ 程みなどまより營業者なごは非常に困難なえ居ると

長期化や経費増加を危惧し、明治十九(一 月に中山道路線が幹線に決定されました。 事的理由より、明治十六(一八八三)年十 (八六)年六月の閣議で、中山道路線から しかし、 発と敵国からの進攻に安全であるとの 鉄道局は中山道路線での工事の

阜)間の測量が着手され、翌明治十八(一 ると、同月に直ちに次の大垣・加 東海道路線への変更が決定されました。 八八五)年一月には支線(尾張線)に位置 大垣間が中山道ルートの一部として開業す 明治十七(一八八四)年五月に、関ヶ原 納(現

M20年開業時の駅位置 M9年案の駅位置(推定) M9年案の駅位置 M18年案の駅位置 曽 M19年開業時の駅位置 計画案の駅位置

当初計画と実際の東海道線

〈出典:東海地方の鉄道敷設史改訂版〉

付けられた加納・名古屋間 の測 量を開

始

近で現笠松町字奈良町)に設置され、 道線))では、「笠松駅」が笠松町東側の木 ら名古屋に至る支線(尾張線(現在の東海 加納駅(現岐阜)の位置は中山道筋に連絡 九(一八七六)年に提出した上告書では、 ス人E. モレルの後任R. 曽川右岸側の奈良津新田 が便利な加納町寄りに計画され、 明治三(一八七〇)年に来日したイギリ (現笠松競馬場付 加 納駅か 木曽

名古屋鉄道各務原)線の安良田町踏切付線ルートに、また加納駅は岐阜町寄り(現 路線となっていました。 松町円城寺付近に設置して、 近)に設置され、 笠松経由のルートが東寄りの現在の東海道 まった明治十九(一八八六)年六月頃には、 川橋梁が架橋される予定でした。 しかし、閣議で幹線が東海道路線に 笠松駅に替わる駅を現笠 木曽川 を渡る

架橋位置の変更木曽川橋梁の

岐阜市 運賃が安いため、 た」([]内は著者加筆)と述べています。 八八七)年四月十五日の岐阜日日新聞は、 「大垣・加納間の鉄道開通で[人力車より 笠松町が架橋と駅設置に反対した通説と このルート変更について、 内の通行人が以前の十分の一になっ 人力車に乗る人が減り」、 明治二十

|往来は衝路ふ當るを以て通行人も隨分多く路傍のtras | せる | 當地西野町ょ京町邊は大垣岐||鐵道連絡の影響 | 當地西野町ょ京町邊は大垣岐 **総屋飲食店なども相應の利潤あましも去る一月加** _____ 鉄道が開通して通行人が1/10 に減少したと述べている明治20 (1887)年4月15日の岐阜日日新 聞記事

と記されています。と記されています。と言されています。と、無いのでは、人々が「架橋によっら」と喧伝されていました。しかし、笠松ら」と喧伝されていました。しかし、笠松集散で生活をしている車夫が失職するかと美濃線(綿または絹綿交織の縞織物)のとうに、新聞報道のように、「駅ができるしては、新聞報道のように、「駅ができるしては、新聞報道のように、「駅ができるしては、新聞報道のように、「駅ができるしては、新聞報道のように、「駅ができる

三、木曽三川の橋梁

型の斜材を上下にして「×」字型に交差さ 十五 (一八八二) 年に来日したC.A.W. の錬鉄製ダブルワーレントラス(「W」字 Oft (正確には二〇八 ft で六十三・四m) ポーナルが、主径間に架ける桁を径間二〇 九十三%(二三八人)はイギリス人でした。 年までに外国人二五六人を雇い、その内、 三(一八七〇)年から明治二十(一八八七) 八七一)年九月に発足した工部省は、明治 なりましたが、モレルの提案で明治四(一 に開始しました。惜しくもモレルは、来日 と讃えられるR.モレルが着任して本格的 年後の明治四(一八七一)年に病で亡く 木曽三川の橋梁設計と架設工事は、明治 鉄道建設工事は、「日本の鉄道の恩人」 イギリスの工場で製作し

行い、完備した図面を前任者で明治十四(一ていましたが、ポーナルは詳細設計も自ら注に必要な各種断面図等の詳細設計を行っ直図、構造物等の一般図)を基に、工事発発注者が行った予備設計(平面図や縦横断なお、イギリスの橋梁メーカーは通常、なお、イギリスの橋梁メーカーは通常、

(一八八六)年に製作しました。 トゥリー社が明治十八(一八八五)、十九メーカーのパテントシャフト&アクスルトンに送り、若干の手直しを受けた後にハハー)年に帰国したT・R・シャービン

日本鉄道に転用されました。連は、利根川橋梁工事が優先され、私鉄・本に着いた第一陣の揖斐川用のトラス橋三しかし明治十九(一八八六)年一月、日

が、明治十八(一八八五)年十月に着手しが、明治十八(一八八五)年十月に着手して同年十二月に施工し、九連一月に着手して同年十二月に施工し、九連三五二m。現福井県敦賀市)掘削で名を挙三五二m。現福井県敦賀市)掘削で名を挙三五二m。現福井県敦賀市)掘削で名を挙三五二m。現福井県敦賀市)掘削で名を挙三五二の鉄橋架やの大道を

果海道線の建設経過									
	大垣 ⇔ 加納 (13.9km)	加納 ⇔ 名古屋							
線路着工	明治17(1884)年 6月	明治18(1885)年 9月							
架橋期間	揖斐川·長良川橋梁 明治19(1886)年 1月 ~ 明治19(1886)年12月	木曽川橋梁 明治18 (1885) 年 10月 ~ 明治20 (1887) 年 4月							
開業	明治20(1887)年 1月	明治20 (1887) 年 4月 加納 ⇔ 木曽川間 (7.6km)							

います。

本語のでは、大垣・名古屋間の鉄道敷設工事のまた、大垣・名古屋間の鉄道敷設工事のまた、大垣・名古屋間の鉄道敷設工事のまた、大垣・名古屋間の鉄道敷設工事のまた、大垣・名古屋間の鉄道敷設工事のまた、大垣・名古屋間の鉄道敷設工事のまた、大垣・名古屋間の鉄道敷設工事のまた。大垣・名古屋間の鉄道敷設工事のまた。大垣・名古屋間の鉄道敷設工事のまた。

四. 木曽三川の橋梁架設と

のような内容の手紙を出しています。八四)年十一月十三日に、エッセルに以下られてからほぼーヶ月後の明治十七(一八られてからほぼ一ヶ月後の明治十七(一八年半前、デ・レイケが下流改修計画を命じるれるの手紙

「私 (デ・レイケ) は、内務省土木局からの電報で、工部省鉄道局が木曽三川に計らの電報で、工部省鉄道局が木曽三川に計らの電報で、工部省鉄道局が木曽三川に計らの電報で、工部省鉄道局が木曽三川に計らの電報で、工部省鉄道局が木曽三川に計らの電報で、工部省鉄道局が木曽三川に計らの電報で、工部省鉄道局に申し入れたことを知った。

そこで鉄道局の飯田俊徳が、私への説明そこで鉄道局の飯田俊徳が、私への説明を上ず返って神戸に帰って行った。」と記したが、縮尺が小さいために図面から寸法を決めることを担ったので、私は飯田に、今後はボーナルと共に現地踏査せずに神戸で設計していたった。また、私はボーナルと共に現地踏査してから寸法を決めることを提案したが、飯田は徳が、私への説明とこで鉄道局の飯田俊徳が、私への説明そこで鉄道局の飯田俊徳が、私への説明

あろうと推測し、その回答として「鉄道橋防天端高さとの差、③標高の基準高さ、で占有する河川の空間、②橋の桁下高さと堤ナルは、私が知りたい事柄を、①鉄道橋がさらにデ・レイケは手紙で、「その後ポー

ます。
ます。
ます。
の桁下を HW(高水位)より一八六〇㎜以の桁下を HW(高水位)より一八六〇㎜以の桁下を HW(高水位)より一八六〇㎜以の桁下を HW(高水位)より一八六〇㎜以の桁下を HW(高水位)より一八六〇㎜以の桁下を HW(高水位)より一八六〇㎜以の桁下を HW(高水位)より一八六〇㎜以の桁下を HW(高水位)より一八六〇㎜以の桁下を HW(高水位)より一八六〇㎜以の桁下を HW(高水位)より一八六〇㎜以

ジ参照。) されることになります。 (一八八五)年六月の洪水痕跡を参考に決定(NJSSO115号六ペー月前の明治十七(一八八四)年七月の洪水三年前の明治十七(一八八四)年五月と四ヶ三年前の明治十四(一八八四)年五月と四ヶ三年前の明治十四(一八八四)年五月の洪水痕跡を参考に決定(アンカーの)を対しての計画高水流

(二) さらなるエッセルへの手紙

なった」と書いています。
した技術者で、知り合いになって嬉しくことを記し、ポーナルを「精神のしっかりは、飯田とポーナルも大垣に滞在しているの手紙で、大垣に滞在しているデ・レイケの手紙で、大垣に滞在しているデ・レイケ

て始まった」と記しています。 改修の実施計画の立案が五名の助手によっなおこの手紙でデ・レイケは、「木曽川

五.揖斐・長良・木曽川の

ました。柱の内部にコンクリートを充填して行われた例の部にコンクリートを充填して行われ川橋梁は井筒工法で、長良川橋梁は鋳鉄製「橋台と橋脚の設置は、揖斐川橋梁と木曽

(一) 揖斐川橋梁

なため、橋台と橋脚は直径約三・七mの円揖斐川での架橋地点は川底の地盤が軟弱

形井筒二基を河床下約二十一mに根 をレンガで構築しています。 井筒間をレンガでアーチを架け、 上部 入れ

掘削して荷重を加えて井筒を所定の深さま トを打設する工法です。 で沈下させ、その後、空洞部にコンクリー 部が空洞で底部が開いている筒状の構造物 戸の囲いのことで、「井筒工法」とは、 ·井筒」とは地面上に木や石で造った井 川底に接している部分を

チ上部の煉瓦部分が昭和 40 年代以降に補強のためにコンクリ で巻き立てられた揖斐川橋梁の橋脚

(二) 長良川橋梁

製柱を用いています。 好であったため、橋台と橋脚の基礎は鋳: 良川での架橋地点は、 Ш 底の地 短質が良 鉄

本を、一方橋脚は、一〇〇ft桁(四連)に は直径約七十六㎝の柱四本を、二〇〇ft桁 つまり橋台は、直径約一mの鋳鉄製柱二

をコンクリートで充填したものです。 硬質な支持層まで到達させ、 (五連) には柱五本を平均九mの深さでの 柱内部の空間

(三) 木曽川橋梁

層が交互した地盤であり、 建設しており、 も、揖斐川の場合と同様に円形井筒工法で ています。 木曽川の架橋地点では、 根入れ深さは約十五mとし 軟弱な粘土と砂 橋台と橋脚と

連合水利土功会の 結 成

架橋工事期間は

揖斐・長良川橋梁の場

笠松町円城寺の木曽川右岸四十六ヶ村の で甚大な被害を受けた現各務原市前渡~現に伴い、慶応元(一八六五)年五月の洪水 に連合水利土功会を結成しました。 内、三十八ヶ村が明治十四(一八八一)年 ところで、木曽川橋梁の架橋位置の変更

水が阻まれることを恐れて堤防補強工事を その他の緊急工事を行い、明治十七(一八 .四)年からは鉄道橋によって木曽川の流 この土功会は、地域からの徴収分と県費 明治十五年度には堤防補強工事と



本の鋳鉄製柱が支える長良川鉄橋 〈出典:濃尾地震写真資料集

井筒工法による木曽川鉄橋の橋脚

: 濃尾地震文献目録

に、寛政十(一七九八)年~慶応元(一八に配慮した工事を要望する『告願書』と共 阜県令小崎利準は、土功会結成さらに翌同十八(一八八五) 卿佐々木高行に提出しています。 住民の苦労を記載した『参考書』を、 曽川鉄橋架設によって水害を被らないよう かった八ヶ村を加えた全四十六ヶ村が、 行っています。 六五) 年までの五回の出水と破堤の経緯や 土功会結成に参加し 年 九月、 工部 な

を費やしてい から一年六ヶ月 八八三) 年十月 合は明治十八(一 が、木曽川の場 完了しています はほぼ一年間で 予算 (円) 18,915 12,974 8,345 8,925 1,771

年度 15 16 17 18 19

十七 (一八八四) から行われた 明 治

工事期

間

長さは、

■参考資料

『岐南町史 通史編

『デ・レイケの書簡集Ⅰ第一一信~第三十三信』 林好之 木曽川文庫蔵 昭和五十九年 岐南町

『笠松町史 下巻』

連合水利土功会の年度予算 〈出典:「笠松町史下巻」

「岐南町史 昭和三十二年 史料編』 笠松町史編纂委員会

昭和五十九年 岐南町 堤防補強工事による影響もあると考えられま

敷設工事に伴って木曽三川の三大河にトラ ス橋が架橋されました。 二十(一八八七)年の直前、

木曽三川明治改修工事が着工される明治

現東海道線の

お

ij

でしょう。 ナルらは、現地で熱い議論を交わしたこと これらの架橋に際して、 デ・レイケとポー

れます。 時としては致し方なかったのでは、と思わ 越流して破堤に至る」と危惧したのも、 橋によって流下を阻止された流水が堤防を ていたとは考えられません。むしろ、「鉄 や「堤防の余裕高」の概念を正確に理解し しかし、 地域の人々が、「計画高水流量」 当

町もさらに発展したと思われる」と記して 道線が笠松町地内を縦貫しておれば、笠松 橋が設置されなかったことに関し、 なお、 『岐南町史』は笠松町付近に駅と 「 東 海

承久の乱と木

本『承久記』に登場する 「阿井渡」の所在に

> 可児市文化スポーツ部文化財課長 川合 俊

見御料寺本殿固以給八伊義渡,以間田照找上田 左衛門朔左衛門園又給八洲侯子八山田殿图又給八山道之 左衛門下條殿加藤到官三十騎。一国以給八上瀬、八海原 柳書間左衛門伍野柳曾司國又給八賣間瀬戸神土敢权橋分セラレヤ丁阿井渡が原入道聖又給八大井户、八駿河 大将軍河內則官奏 中納言有雅伏見了八中都門中約言宗行学洗了八坊門新 殿もコハスシテ相横守ノ子のマテレタ遠江ノ 海道,光降相撲守逢江國橋本人高三少者 ラアリケレ五古人八三尾の崎二百人八瀬田梅 納言忠信魚市內以官野執行大渡り八二位法眼尊長下 一万二年騎り十二八本户へ散ス章ョツ裏レナレ去記 殿ラ始トンター午騎高陽院殿ニリ第二ル去程二海首 行料三間引致大網九筋引八 ハシケル下野母,即等安養太郎下云者八阿房園,住 八大豆户中八能整守王判官国ノケり食坂ラハ安藝京 了八個豫河野四郎入道。仰付了一 上北京察良印地。御問子上十二異木馬 り字治ハナニ、甲髮宰相中将乾茂右衛門伍衛入道と 倉人官物灣于上多分山力号失殿人裏中八妻 沒獨在是鄉小十山野三著軍ノ手 豆御費司固 所給以火御子ラハ打 四思禄可箭股身 乱机进本引力持懸力 り残い人々ハ桜 シンタン都 佐之木野

慈光寺承久記(安藤新助写([明治]写)) 〈出典:国立博物館所蔵品統合検索システム

(https://webarchives.tnm.jp/dlib/detail/2612;jsessionid=0E1CA2B807C23FD 079F17CD7351B9446)

資料名: QA-1115 画像番号:DIGITAL-L0207327>

	洲俣		上瀬	食渡	大豆戸	伊義渡	火御子	板橋	売間瀬	大井戸	阿井渡	慈光寺本	
市河前	墨	稗島		食ノ渡	大豆途	気瀬		板橋	鵜沼ノ渡	大炊ノ渡		慶長古活字本	
市脇	洲俣			食渡	摩免戸	池瀬		板橋	鵜沼渡	大井戸渡		吾妻鏡	

表 1 木曽川合戦における京方の防衛拠点



その後の日本の歴史を変えるような大事件が起 に大勝し、京に向かって進軍していきます。 なったのが美濃と尾張にまたがる木曽川流域 きました。「承久の乱」です。その緒戦の舞台と で、兵力に勝る鎌倉方(幕府軍)が京方(朝廷軍 今から八〇〇年前の承久三(二二二) 承久の乱を描いた軍記物語である『承久記』 年に、

万余騎、北陸道は北条朝時、結城朝広等を大道軍は武田信光、小笠原長清等を大将軍に五 始します。『吾妻鏡』によると、東海道軍は東山・北陸の三道から京に向かって進軍を開 将軍に四万余騎、合わせて十九万余騎とされ 北条時房・泰時等を大将軍に十万余騎、 子の演説などにより、団結した鎌倉方は東海 す。「承久の乱」の始まりです。 京方のこうした動きに対し、有名な北条政 東山

られていない「阿井渡」の所在について考えて

方の防衛拠点として「阿井渡」が一度だけ登場 の「慈光寺本」には、この木曽川合戦の中で京

します。本稿では、先行研究ではほとんど触れ

みたいと思います。

東山・北陸の三道に、 ています 山・北陸の三道に、藤原秀康・秀澄、一方、京方も鎌倉方に対抗するため、 東海・ 三浦

(一二二一)年五月、後鳥羽上皇による幕府 幕両者の緊張が高まります。そして、承久三 殺され、その後継をめぐる問題などから朝・ 路線を取っていた鎌倉幕府三代将軍実朝が暗 建保七(一二一九)年一月に朝廷との協 木曽川合戦につい

着なよし 義よし

しますが、兵力は鎌倉方の十分の一程度の

佐々木広綱、大内惟信等の諸将を派遣

執権北条義時追討の挙兵につながっていきま 場所は、 を

「慈光寺本」では、この京方の配置の 「山道・海道一万二千騎ヲ十二ノ木戸へ散) 状況 とによります(図1)。 五八六)年の大洪水までは木曽川の本流が今 すものと考えられています。なお、この中で 木、「大豆戸」は現在の各務原市の前渡を指する発原市の鵜沼、「伊義」は各務原市の場 ある「大井戸」は現在の可児市土田、「売間瀬」 を整理したものが表1になります。この表に たがる木曽川でした。京方が防衛地点とした 万九千余騎とされています。 と異なり、現在の境川あたりを流れていたこ 防衛ラインとしたのが美濃・尾張の国境にま |洲俣(墨俣)」が入っているのは、天正十四(一 その京方が鎌倉方を迎え撃つための最初の 典拠資料により異なりますが、それ

たるという京方の戦略ミスを痛烈に批判して 大軍を相手に少ない軍勢を分散して防御に当 ス事コソ哀レナレ」と評しており、鎌倉方の

児市)の渡河戦から始まります **倉方の東山道軍による大井戸・河合渡** 木曽川をめぐる攻防戦は、六月五日夜の鎌 (現可

の武士の奮戦はありましたが、 すが、子の惟忠が討たれ、敗走します。その ある東山道軍の大内惟信です。大内惟信はわ 倉方の圧勝に終わりました。 田重忠(「慈光寺本」では重貞)などの京方 ずかの軍勢で鎌倉方の大軍を相手に奮戦しま ど数か国の守護であり、有力な在京御家人で 大井戸渡を守るのは源氏の一族で、美濃な 戦線はその下流に移っていき、尾張の山 最終的には鎌

出で鎌倉方の北陸道軍との戦いにも敗れま す。そして、京方は宇治・勢多方面で最後の に京を占領されることになります 決戦に臨みますが、そこでも敗北し、 また北陸道の京方も越中と加賀の境の砺 鎌倉方

「慈光寺本」に登場する 阿井渡.

久記』などを挙げることができます。 は、編纂物である「吾妻鏡」や軍記物語の『承 この承久の乱に関する基本的な資料として

とが指摘されています 格上、北条氏を擁護・顕彰する傾向が強いこ に成立したと考えられており、その史料の性 力を握っていた(得宗専制)十三世紀末ごろ 執権北条氏の嫡流である得宗家が絶大的な権 『吾妻鏡』は鎌倉幕府が編纂した歴史書で、

物語で、現在に伝わるものとしては「慈光 より内容や表現がかなり異なっているもの の四系統に分けることができ、テキストに 寺本」、「流布本」、「前田家本」、「承久軍物語_ また、『承久記』は承久の乱を描いた軍記

> う研究者もいます。 それらの部分については、もともと存在し いなどが全く書かれておらず、乱全体の戦 戦いや、最後の激戦である勢多・宇治の戦 るのが「慈光寺本」で、十三世紀の中頃に ていたものが、欠落したのではないかとい いの様相がわからないという点もあります。 ます。その反面、「慈光寺本」では北陸道の 期に書かれた、ほぼ同時代的な資料といえ 光寺本」は乱後それほど経過していない は成立したと考えられています。つまり「慈 これらの『承久記』の中でも最古態とされ

の系統に位置づけられるものです。 「慶長古活字本」は『承久記』の また、このほか表1のところで引用した 「流布本」

だけ登場します れず、「慈光寺本」の中で次のように、 は、『吾妻鏡』や「慶長古活字本」には見ら 本稿において論点となっている「阿井渡」

山 滋原左衛門・翔左衛門固メ給へ。洲俣ヲバ 加藤判官、三千騎ニテ固メ給へ。上瀬ヲバ、 官固メケリ。食渡ヲバ、安芸宗左衛門・下條殿 寺本殿固メ給へ。伊義渡ヲバ、関田・懸桟・ 伊豆御曹司固メ給へ。火御子ヲバ、打見・御料 駿河判官・関左衛門・佐野御曹司固メ給へ。 国垂見郷小ナル野ニ著、 十二ノ木戸へ散ス事コソ哀レナレ。」 上田殿固メ給へ。大豆戸ヲバ、能登守・平判 売間瀬ヲ神土殿、板橋ヲバ荻野次郎左衛門 阿井渡、 [田殿固メ給へ」。山道・海道一万二千騎ヲ 「去程二、海道大将軍河内判官秀澄、美濃 蜂屋入道堅メ給へ。大井戸ヲバ 軍ノ手分セラレケリ

ではなく、長良川に布陣したことになり、 井渡」をこの比定地とすると、京方は木曽川 新日本古典文学大系四三『保元物語 と言及してあるだけのように思われます。「阿 国の横越(現、 管見の限り、「阿井渡」の所在については、 承久記』の脚注に「未詳。あるいは美濃 岐阜県美濃市藍川)付近か。」 平治物

理的に無理が出てくるように思われます。

を注目してみたいと思います。 り「阿井渡」の守将を任された「蜂屋入道 光寺本」の中で東海道大将軍の藤原秀澄によ しょうか。それを考えるヒントとして、「慈 それでは、「阿井渡」はどこにあったので

るのは、次の四つの場面です。 「慈光寺本」の中で、「蜂屋入道」が登場

河合渡」の戦いの中で、蜂屋入道及びその子 三郎は戦死しています ろで、最後は、④木曽川合戦緒戦の「大井戸 るのが、③先ほど引用した「阿井渡」のとこ の後に名前が書かれています。続いて登場す 子三騎」が登場します。前述の大内惟信はそ 京方の東山道の大将軍の筆頭に「蜂屋入道父 しているという押松の報告を受け、迎え撃つ 騎」として、次は②鎌倉の大軍が上洛を目 の中で、美濃国の三番目に「蜂屋入道父子三 三郎の奮戦ぶりが描かれ、蜂屋入道は自死 ①後鳥羽上皇の挙兵時に京に召された武十

荘に分かれます)を本拠とする在地の武士と 流の一族で、美濃国の蜂屋荘(蜂屋北荘と南 この蜂屋氏は美濃源氏(頼光流) の山県氏



蜂屋氏と蜂屋荘

考えられています

られます 園の南限が木曽川まで及んでいたことも考え などの存在が確認されていないことから、荘 ころ、美濃加茂市南部地域にはその他の荘園 ては明確にはわかっていませんが、現在のと 園だったのです。なお、蜂屋荘の領域につい ものです。蜂屋荘は京都と深い関係がある荘 をかなえることができないと断られたという 地頭を置かないことになっているので、望み を望みましたが、本荘は後白河法皇の仰せで 蜂屋荘と関係があるということでその地頭職 の功臣ともいうべき千葉介常胤が自分の家はれは、建久六(一一九五)年、鎌倉幕府草創 の興味深いエピソードが書かれています。そ 鎌倉時代初頭、後白河法皇の寄進により成立 (図2)。「吾妻鏡」には、この荘園について した王家領荘園である長講堂領に含まれます 蜂屋荘は、現在の美濃加茂市南部にあたり、

といえます。 は、地の利を考えた京方の作戦の一環だった のの、立派に武士であったと評価されていま 合渡」での戦いに出陣し、戦いには敗れたも 頭不設置の可能性がある本拠の蜂屋荘の一 な軍事力として活躍しています。 濃国の在地の武士でありながら、 「慈光寺本」の世界の中では、 蜂屋氏が「大井戸・河合渡」で戦ったの もしくはその近くにあたる「大井戸・河 そして、地 蜂屋氏は美 京方の重要

兀 戦いの描かれ方 「大井戸・河合渡」 ഗ

渡」は、現在の可児市と美濃加茂市の境界線 ておらず、 上にあり、両者は数キロほどの距離しか離れ その蜂屋入道父子が戦った「大井戸・河合 地形的にはほぼ平坦地に位置して

笠原氏が大井戸渡を攻撃したというように 「慈光寺本」では、武田氏が河合渡を、 川

に変わってきます。 戸と河合の渡の戦いが一体化するような描写 ソードを見てもわかるように、途中から大井 河合渡の攻撃を担当している武田六郎のエピ 氏の郎党である市川新五郎の行動を見て嘆く 寺本」においてさえも、大井戸渡での小笠原 合渡」が表記されなくなります。その「慈光 活字本」では「大炊ノ渡」というように、「河 すが、『吾妻鏡』では「大井戸渡」、「慶長古 「大井戸渡」と「河合渡」を書き分けていま このことは、平場の近距離間の二つの渡

いでしょうか。 の戦いの描写がなくなっていったのではな ます。そのため、後世の資料では「河合渡」 井戸渡」に収斂されていったように思われ 必要もなく、より大規模な戦闘があった「大 あえて大井戸渡と河合渡を使い分けて描く しで行われた大軍による合戦については、

が登場してこない『吾妻鏡』では蜂屋氏の記 戦った蜂屋氏の記憶が忘れ去られ、「河合渡! それにしたがい、河合渡を主戦場にして





川合渡し跡(手前が可児市。 右上奥が飛騨川)

光寺本」でわずかに「美濃国ノ住人蜂屋ノ冠 落テ被討ケリ。」とあるのみです。 者モ引退ケルガ、信濃国住人伊豆次郎二被組 述は全く現れず、『承久記』の系統である「慈

五 「河合渡」と「阿井渡

その武田氏は河合渡の渡河戦を担当している とが描かれています。そして、同本によると、 最後は武田八郎の助勢により討ち取られるこ 道の子の蜂屋三郎は武田六郎と組打ちをし、 の「大井戸・河合渡」の戦いの中で、蜂屋入 ことになっています。 そこで、話が少し戻りますが、「慈光寺本」

うことを考えてみました。「さんずい」の「河」 井渡」と誤って伝えられたのではないかとい 軍の藤原秀澄により蜂屋入道が防衛を任され と「こざとへん」の「阿」のくずしは似ている 寺本」が伝わっていく過程で、「河合渡」が「阿 なかったかということです。つまり、「慈光 た「阿井渡」は、実は「河合渡」のことでは これまでの状況を踏まえると、東海道大将

子を配置したと考えられます。 拠の近いと思われ、地の利がある蜂屋入道父 を京方は重視し、鎌倉方の東山道軍を迎え撃 つ重要な防衛地点として、前述したように本

井渡」の所在について考えてみました。 木曽川をめぐる攻防戦合戦について紹介する る承久の乱の中で、この地方とも関係の深い とともに、「慈光寺本」に一度だけ登場する「阿 本稿では、十三世紀の「関ヶ原」ともいえ

テキストの比較検討を行ったわけでなく、 写されたのではないかというものです。本稿 めて不十分なものといわざるを得ません。 況証拠から考察したもので、「慈光寺本」の については、時間的な制約もあり、多分に状 ていく過程で、「河合渡」が「阿井渡」に誤 今回、このような不十分な状況の中で、 その結論としては、「慈光寺本」が伝わっ 極

井渡」の所在についての問題提起をさせてい

『美濃加茂市史』通史編 『美濃加茂市史』史料編

九七八年

九八〇年

ところもあります。同様の誤記は、「慈光寺本. いう音になります。 と「河井」であれば、 いえるように思われます。加えて、「河合. において「大御子」と「火御子」の事例でも 両方とも「かわい」と

との説明がつかないように思われます。 井渡」と「河合渡」が使い分けをしているこ だとするならば、「慈光寺本」であえて「阿 いうことも考えられるかもしれません。そう する「合(あい)」が「阿井」に変化したと 合流しており、川と川が合流する場所を意味 なお、「河合渡」付近で木曽川と飛騨川が

運行されていました(写真2・3)。 と美濃加茂市川合(北川合)とを結ぶ渡船が 合大橋が完成するまで、可児市川合(南川合) といい、昭和五十一(一九七六)年九月に川 話しします。「河合渡」は現在「川合の渡し. 最後に、現代の「河合渡」について少しお

このような交通の要所であった「河合渡



■参考文献 『承久の乱と後鳥羽院』(「敗者の日本史」6) 関幸彦 二〇一二年

『保元物語 平治物語 承久記』 『承久の乱 『承久の乱』 坂井孝一 本郷和人 二〇一八年 二〇一八年

『各務原市史』史料編 『岐阜県史』通史編 『蜂屋の歴史』 神保朔郎 岩波書店 中世 一九七八年 九六九年 九九二年

『各務原市史』通史編 自然・原始・古代・中世 九八四年

『可児市史』第二巻 通史編 自然・原始・古代・中世

『可児町史』通史編 **『可児市史』第三巻** 古代・中世・近世 民俗編 二〇〇七年 二〇一〇年 九八〇年

昭和51年の川合の渡船の様子 写真3 〈提供:可児市役所〉

水にまつわる民話

(美濃加茂市三和

参考文献 。美濃加茂市史 民俗編

*ベンズルさまは、

一般にはビンズル(賓頭盧)と呼ばれる、釈迦の弟子のひとり。

日本では

なで仏の風習が広がりました。

この像を撫でると除病の功徳があるとされ、

そばを流れる小川は薬師川. 中 世 屋の旧分教場には、 と呼ばれています むかし薬師如 来が安置されていました。

今でも

き村の若者が、 た。 ある年の夏、 薬師川のほとりにベンズルさまという仏像が祀られていましたが、 すると、空がにわかに暗くなり、雷鳴とともに激しい豪雨になりました。 長い日照りがつづき、 仏さまをきれいにしてさしあげようと、 田畑の作 薬師川に投げ入れま あると

船頭平閘門に関わるコラム「船ちゃんのこぼれ話」の掲載を始めました。

淵というところにベンズルさまを沈めました。 ことができました。 川に投げ入れたときのことを思いだして、 物はもちろん山野の草木も枯れそうになりまし たちまち大雨になって、 村の人たちは、 傘踊りをおどって雨乞いをしたとこ 以前若者がベンズルさまを 村人は一安心する 龍王

雨乞いの人が参詣に来たといいます 名が知られ、 それからは、 日照りになると山之上や蜂屋からも、 雨乞いの仏さまとしてベンズルさま

が降るといわれていました。それでも雨が降らないときには、 水の量によって降る雨の量も変わるのだそうです。 枝でふりかけると少しの雨が、 説では、このベンズルさまは水をかけると雨が降るとされていて、 ベンズルさまを川に放り込んだということです バケツの水をひしゃくで注ぐと程ほどの雨 どんぶり鉢の水をシキビ 最後の手段と その

KISSOは、創刊号からの全てが木曽川下流河川事務所のホームページよりダウンロードできます。

〈提供:美濃加茂市観光協会ホームページから引用〉 この観音堂には、平安末期、木曽義仲にゆかりのある若名御前の菩提を供養するために訪れ、大波の中を小船で中の島に渡ろうと 水の中から馬頭観音を背にした龍神が現れて波を鎮めたことに大いに喜んだ義仲が建てたとの言い伝えが残っています。

^{ふね} 船ちゃんのこぼれ話 第九話

表紙写真

ンガってどこの国の

平成30年の皇太子殿下行啓を記念して、

『レンガ』と表記されることも多く、外来語と思われやすいのですが、英語だと『ブリック (brick)』、中国語 だと『ツェン(塼)』で、『レンガ(煉瓦)』は日本独自の呼び名です。『煉』は、練り合わせる・熱して不純物を 取り除き良いものにする、などの意味で使われる漢字で、今回は『煉』+『瓦』に落ち着くまでをみてみたいと 思います。

日本の煉瓦製造は、白煉瓦(耐火煉瓦)、赤煉瓦(一般建築用煉瓦)ともに、幕末が起源です。白煉瓦は佐賀 藩が嘉永3 (1850) 年頃焼かせたもの、赤煉瓦は蘭人海軍将校のハルデスが、安政4 (1857) 年頃に長崎の 瓦屋に焼かせたものとされています。



東京銀座煉瓦通り京橋際の図・針谷と松田 の名見ゆ廣重筆7年五月版錦絵) 〈出典:増補改訂 明治事物起原 下巻〉

日本は、赤煉瓦よりも製造が困難な白煉瓦を、先に成功させた珍しい国です。しかも蘭書と有田焼などの在 来の技術を駆使し、日本人のみで作り上げました。この頃の書での白煉瓦は、『焼石』・『土角焼』・『白焼の石』と表記されています。その少し後とな る、万延(1860)・文久(1861~1863)年間に欧米を視察した人々の日記でも、『煉瓦石』・『練瓦石』・『練化石』・『煉化石』・『錬化石』と、まだ 色々な漢字が使われています。

明治に入ると、官庁の文書や新聞においては『煉化石』という表記に落ち着き始めます。しかし、文明開化の象徴となった銀座煉瓦街(明治5年~10 年建設) を紹介する民間の文書(明治6~12年頃) をみると、『煉化石(土を練りて石に化し・・)』・『煉瓦石』・『練化』・『煉瓦』と様々な表記のまま です。それがいつしか 『煉瓦』 が市民権を得ていったようで、明治30年代頃には官庁の文書中も含め 『煉瓦』 に統一されていっています。

当初は、技術者の苦労がにじみ出ているような、「焼」いた石・「煉」った石、という表現から、瓦の職人や産地を中心に製造が広がっていった文化的 背景を含むような表現の、『煉瓦』という言葉に落ち着いていったようです。

ちなみに、明治35 (1902) 年に完成した船頭平閘門の工事竣工内訳書では、いったん定着しかけたかと思われた 『煉化石』 が使用されています。

『KISSO』 Vol. 117 令和3年2月発行

木曽三川歴史文化資料編集検討会(桑名市、木曽岬町、海津市、愛西市、弥富市ほか)

国土交通省中部地方整備局木曽川下流河川事務所 〒511-0002 三重県桑名市大字福島465 TEL (0594) 24-5711 ホームページ URL https://www.cbr.mlit.go.jp/kisokaryu/